



Office 2003とSharePoint Servicesの連携が「コラボレーション」のキーポイント

現代では1人だけで達成できる仕事はそう多くはない。インターネットも含めたネットワークを使い共同作業を効率的に行うことは、個人の生産性も高め、また全体の仕事の効率も高めてくれる。

オフィスで使われる最高のソフトを目指すOfficeとしては、このコラボレーションを視野に入れないわけにはいかないだろう。そのためにOffice 2003は、Windows Server、Exchange Serverなどをはじめとする非常に多くのサーバー

と連携する機能を持ち、それらとつながることで本来の力を発揮できるように設計されている。その中でも、コラボレーションを達成するための新しいエンジンとして開発されたのがWindows SharePoint Services(SharePoint)だ。SharePointはWindows Server 2003のアップデートパックとしてもリリースされる予定で、単体でもグループウェアサーバーとしての機能を持っている。しかし、SharePointをOffice 2003と組み合わせたとき、コラボレーションの新しい次元が始まる。Office 2003とSharePointを普



通に使っているだけで、ユーザーはそれと意識することなく、マイクロソフトの進める.NETテクノロジーを使った社内ポータルサイトや共有スペースを作り、ネットワーク経由のデータベースと連携した仕事をこなせるようになっているのだ。

108ページ



インフォメーションワーカーへのパラダイムシフト

Office 2003 で仕事が変わる!

特集2

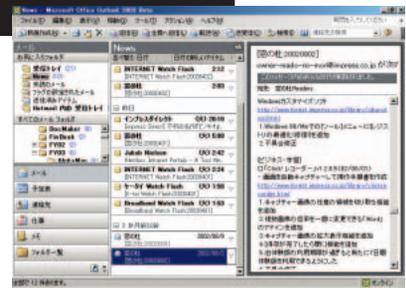


「Outlook」と「Exchange」で企業のリソースと個人のリソースは融合する

コラボレーションは実は個人の能力に頼っている。1 + 1 = 3にするのがコラボレーションだが、結果を3にするためには、個人にコラボレートする能力が必要なのだ。この個人のコラボレーション能力を支援するのがOutlookだ。ほかのOfficeファミリーがデザインをほとんど変えていない一方で、Outlookだけがデザインを大きく変えているのも、メール処理などコラボレートするためのオーバーヘッドを減らしながら、お互いが信頼できる仕事の環境を作り出すためだ。

そして、今回のバージョンアップではOutlookはネットワークを利用して

Exchange Server 2003と接続しなければ本来の力を発揮できないといっているほど、バックエンドとの連携が強化されている。たとえばExchange Server 2003に接続しているグループ全員が持っている連絡帳やスケジュールなどのリソースを常にクライアントPCに表示できる。これで、コラボレーションワークの効率がかなり上がるはずだ。もちろんExchange Server 2003と組み合わせることで、帯域の速度やサーバーへの負荷が改善される仕組みとなっている。大企業の基幹としての使用にも堪えるようにさまざまな部分に手を入れられているのだ。「Office



System 2003」というネーミングからもわかるように、サーバー、企業システムとの連携を前提としているこのツールは、企業という組織が抱えている巨大なリソースに迅速にアクセスするためのフロントエンドツールとして、生まれ変わったのだ。

110ページ



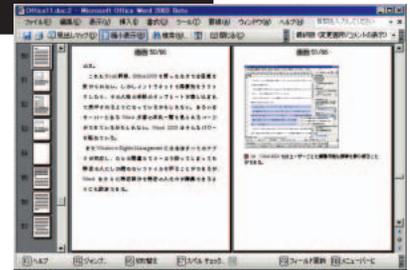
文書作成作業を個人レベルから全社レベルへ引き上げる「Word」

Word 2003は文書を作成して、配布し、読む、という幅広い領域でコラボレーションと個人の生産性をカバーしている。たとえば、1つのドキュメントを複数人で作成する機能、また配布する文書に関して「社外秘」のように、読める人間の制限をつける機能など、ただ文書を作成するだけでなく、それをどのようにグループの中で扱うかといったところまでを含めた機能が多く追加されている。

ただし、Wordの文書は構造化するのが難しく、せっかく作った文書を蓄積されたデータベースとして再利用するといった用途には向いていなかった。たとえ

ば新しい顧客を企業システムに入力すると、自動的にWordが起動して、入力内容が反映された挨拶の手紙が表示されるなどといったニーズも根強いが、自由な表現を実現するWordだからこそ、これを実現するのは難しいポイントだったのだ。

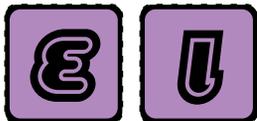
Word 2003はXMLに対応することで、こういった企業システムとの連携も可能にしている。Wordを使ってフリーハンドで作成した文書にもかかわらず、XML形式で保存することで、それをデータベースとしてネットワーク越しに蓄積、または連携させて新たな文書を効率的に作れるようになっている。文書作成という、一



見“個人”で行う作業のように見えるものも、ネットワークを通して全社の、そして全社員のビジネスプロセスを反映させ、さらに便利にしていく。このWordの企業システムとの連携によってOffice 2003の文書作成はさらに強力になった。

2003年夏、「仕事」という言葉の意味は変わってしまうかもしれない。この変革を起こすのが2003年度第3四半期にリリースが予定されている「Office System 2003」(以下Office2003)だ。この製品が目指すのは、どのような環境でも、企業が蓄積しているデータベースからさまざまなデータを引き出し、個人がアクションを起こすこと。そして、スケジューリングなどを含めた個人の生産性のアップと、グループでのコミュニケーション、コラボレーションの革新だ。Officeは、単なるワープロソフト、表計算ソフトなどの集まりから、そのような仕事にパラダイムシフトをもたらすツールへと進化しつつある。

Text: 石井宏治 <http://www.gluesoft.co.jp>



「Excel」「InfoPath」がXMLのフロントエンドツールになる

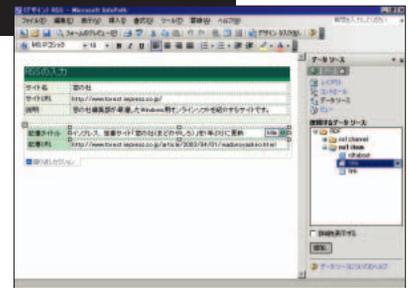
巷では猫も杓子も「XML」と言うが、どうもぴんとこない。あまり恩恵を味わっていないからだ。しかし、Office 2003がそれを変えるかもしれない。

XMLはたとえば、情報に対して「住所は都道府県で始まり、市町村名が続き、番地があります」という規則を決めるものだ。もちろん実際の住所はそれほどきれいには規則が決まっていない。だから住所を入力するときはいつも「都道府県」「市町村」などと、入力する人間が分類ごとに分けてやらなければならない。

これがもし規則がきちんと決まっていたら、入力を受けるプログラムが勝手にデ

ータを処理してくれるだろう。つまりデータを解釈するルールを、XMLを使ってコンピュータが理解できるように決められれば、プログラム側でデータの整理などを自動的に行うようになり、ユーザーの負担はグッと減る。

たとえば、普段使っているExcelでXMLを処理できるようになれば、Excelに入力した出金伝票をそのままネットワークを通して企業システムが処理してくれるようになるかもしれない。そうなれば今までよりも手間が減った分、新しいサービスを作れる。XMLの恩恵は、そんな風にゆっくりとやってくるのだろう。

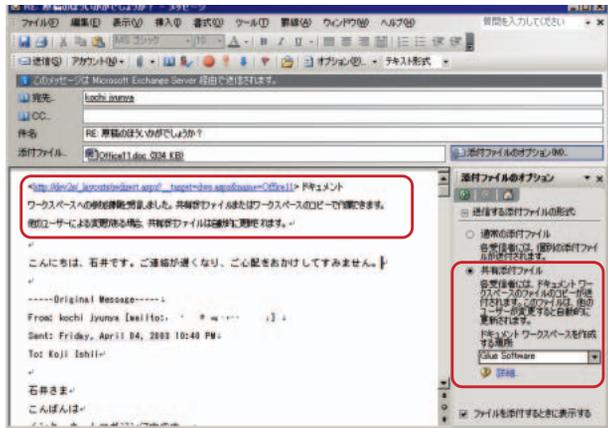


Office 2003ではExcelもAccessもXMLに対応し、さらに新アプリケーション「InfoPath」がファミリーに加わる。これらXML対応のOffice 2003が変える世界を見ていこう。



Office 2003と SharePoint Servicesが 生み出す新次元の コラボレーション

画面1: Outlook から「共有添付ファイル」を送る



Outlook 2003で文書を添付してメールを送るときに、新しいワークスペースを作成し、そこに添付の文書を保存することが、ワンクリックで可能になっている。

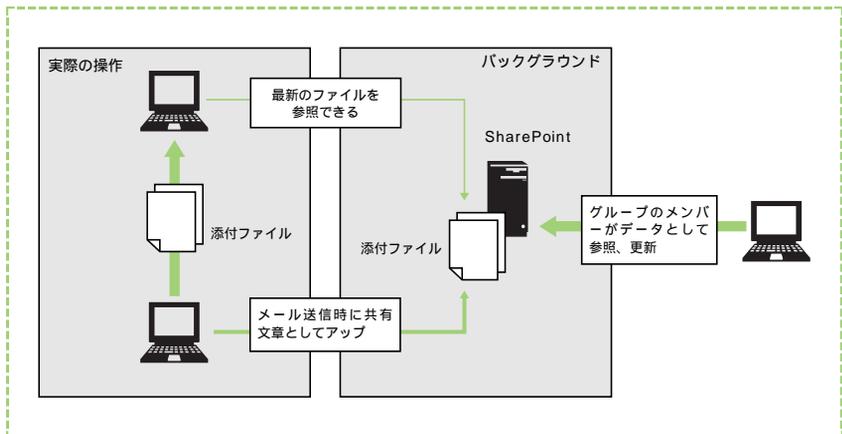
もはや企業において、“共働”について考えずに仕事の効率化を語ることはできない。だからオフィスで使われるOffice 2003がコラボレーションの実現を第一の目標に掲げたとしても不思議ではない。そしてその実現を陰で支える立役者がWindows SharePoint Services(以下SharePoint)と呼ばれるサーバーコンポーネントだ。

Officeに「ワークスペース」という概念を導入したSharePoint

グループで働いているとき、特定の案件についてグループ内の数人で共同作業をする場合というのはまああるだろう。ただ、こういった共同作業は人数や期間もまちまちで、浮かんで消えるものだ。小規模でメンバーが毎回異なるような共同作業が現れては消えるのが実際の「グループワーク」だ。

SharePointではこの「グループワーク」をワークスペースをすることで管理できるようになっている。ネットワーク上にグループ内の個々の仕事、会議、そういったものそれぞれに関連する情報とメンバーを1か所に集めることのできる「スペース」が用意されるのだ。そして、Office 2003を使えばさらに簡単に、このワークスペース

図1: メール送信と同時に添付書類が共有ドキュメントとなる



を使えるようになる。共有したいファイルをメールに添付するときに画面1のように「共有添付ファイル」を選ぶだけで、自動的にワークスペースが作成され、そこにファイルが保存されてから、現在のファイルとともにリンクが送信される。送信のあとにだれかがファイルを更新しても、受信者はいつでも最新のファイルを見ることができる。ワークスペース内のファイルをOffice 2003で開くと作業ウィンドウが開き、ワークスペース内のファイルや仕事などをOfficeの中から参照、変更も可能だ。

つまり、「メールでファイルを添付して送信する」という何でもない行為だけで、ネットワークを使い、ファイルサーバーにフ

ァイルをアップするということまで済ましてしまうのだ。もちろん、添付したファイルは、個別のクライアントに保存されるだけでなく、サーバー上のワークスペースにリソースとして保存される(図1)。このリソースを利用して、さらに次の仕事に発展させる、新しいグループメンバーのナレッジにすることも可能だ。

また、SharePointをセットアップするとすぐにグループポータルサイトが作られ、簡単に、そして日常的にコラボレーションを実現する準備が整うのも、注目すべき点だ。Office 2003とSharePointの組み合わせはこのようにしてコラボレーション環境を実現してくれるのだ。

データベース作成を意識せずに 行う「リスト」管理機能

「リスト」というのは聞きなれないが、Excelの表だと思ってほしい。たとえば住所録をExcelで管理していれば、この列は名前、この列は電話番号、この列は住所と決めているだろう。それがリストだ。このリストをSharePointで管理、共有し、クライアントのOffice 2003で使うことも、コラボレーションワークを進める上で重要なポイントだ。

SharePointには表1のように標準のリストもいくつか定義されているが、これ以外にも自由に列を定義できる。

Outlook 2003では、SharePointに共有のリストとして管理されているグループのイベントや共有の連絡先、ToDoなどを、自分の予定表や連絡先と合わせて表示できる。新しくリストを作成するのもExcel 2003があれば簡単になる。詳しくはExcelの章で述べるが、Excelの中から数クリックでSharePoint上にリストを作成することができる。そしてSharePointのリストはExcelと同期させることもできるので、家に持ち帰って編集した結果を書き戻すこともできる。

つまり、SharePointとExcelを使うことでデータベースを意識せずにデータベースの便利さを享受でき、さらにOffice 2003がそのSharePointとExcelで作ったデータベースの更新などを行うフロントエンドツールとして提供されているのだ。

最新技術をだれでも使えるように したドキュメント管理サーバー

SharePointは基本的なドキュメント管理サーバーとしての機能をひととおり備えている。たとえば、「チェックアウト機能」を使えば、SharePoint上でネットワーク越しに作業しているドキュメントの変更は、再度チェックインするまでほかの人には見えず、上書きや間違い保存の可能性はなく

なる。またドキュメントに対して分類などの情報(メタデータ)を自由に追加し、それを元にドキュメント検索をする機能もある。全文検索が標準ではついていないところが足りないと言えば足りないが、大規模なデータベースをあつかうSQL Serverと連携させれば全文検索ができるように検索ボックスが表示される。IFilterという拡張コンポーネントを入れれば、たとえばPDFなどのドキュメントも検索でき、企業内に必要な情報にすぐにアクセスできるようになるだろう。

そしてもちろんここでもOffice 2003との連携がキモとなる。画面2はWordでSharePointにドキュメントを保存する画面だ。普段と同じ保存画面の中に、フォルダーの代わりにSharePointの文書リストが表示されている。対象のドキュメントが管理サーバー側(SharePoint側)にあって

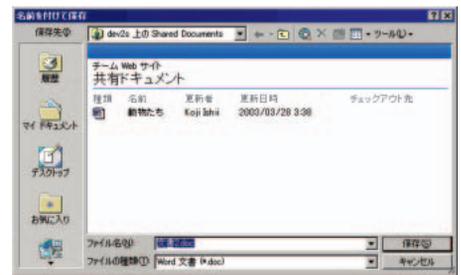
もファイルの作成、保存、検索など、ブラウザを一切使わずに、Office 2003の中からすべて操作できるのだ。つまりSharePointで構成された企業のバックエンドは、バックエンドと意識することなくネットワークでクライアントとつながれ、バックエンドのリソースをOffice 2003で使うことができるのだ。

実は、これだけの作業を行う中で、ASP.NET、SQL Server、XML ウェブサービスといった最新技術を使っている(図2)が、利用者がそれを意識する必要はまったくなく、今までのOfficeと変化がないように使える。いままでと同じに見えるOfficeの中で、新次元のコラボレーションを行い、企業が持つ莫大なリソースを活用する。それがOffice 2003とSharePointで実現される新しい「仕事」の方法だ。

表1: SharePointの標準のリスト

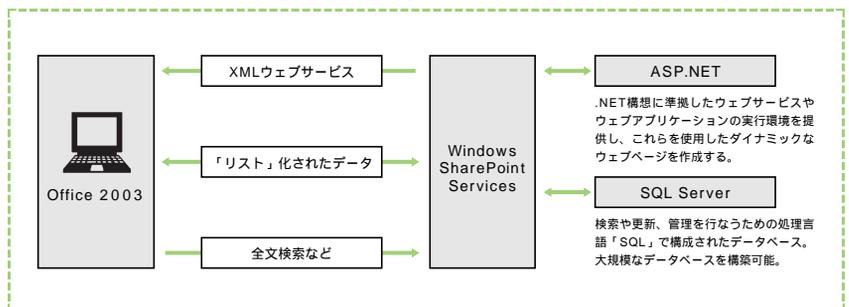
連絡先	OutlookでOutlookの連絡先と同じように表示できるリスト。
イベント	OutlookでOutlookの予定表と同じように表示できるリスト。
To Do	担当者、進捗、開始日、期日などを設定できる。
お知らせ	投稿日、期限を設定できる。
リンク	リンク集を管理できる。
案件	To Doとほぼ同じだが、分類や関連する案件を設定できる。

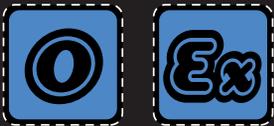
画面2: ドキュメントの保存はローカル/共有がシームレスになる



OfficeでSharePointに保存する画面。画面上部の保存先に[Shared Documents]と表示され、普通のフォルダーに保存するときと同じように保存することができる。

図2: バックグラウンドで高度な処理をするSharePoint





グループメンバーと 企業のリソースを 常に身近に置くための 「Outlook」と 「Exchange Server」

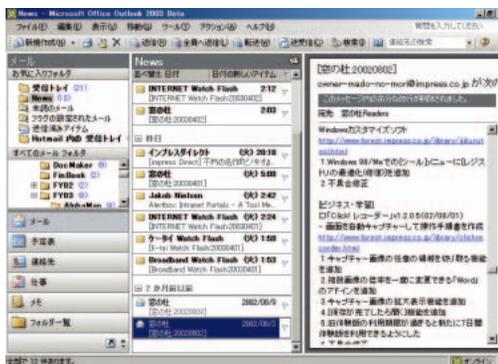
コラボレーションは、メンバーがお互いにきちんと情報交換して確認しあい、割り振られた仕事を期限内に仕上げていく必要に迫られる。また、メンバーの状況、企業の情報の状況を常に把握しておかなければうまくいかない。これらを円滑に進めるために個人をサポートする中核となるのがOutlook 2003と、連動するメールサーバーとグループウェアの機能を持ったExchange Server 2003だ。

“共働”に向けてメールの処理を すばやく、確実に

メールの重要性が増してくるにつれ、メール処理時間は長くなる。複雑さとスピードが増している今の仕事環境で、メールの処理に時間をかけることなく確実にこなしていけるツールが必要だ。

Outlook 2003の新しいプレビュー画面は、画面下でなくて右側に置ける。画面スペースの有効活用の面だけでなく、行幅を狭くすることで読みやすくなる効果も持つ。これによって、メールの一覧部分の幅が狭くなってしまったが、利便性を損なわないようにするためOutlook 2003では一覧の表示方法も改善されている。今日届いたメールなら、日付を表示せずに時間だけになる。今年なら年を表示しない。

画面3:メールを読みやすくなったOutlook



Outlook 2003の広いプレビュー画面で、以前のバージョンのようにしっかりと読みたいメールを開かなくても、全体が読めるようになった。

画面4:グループ機能、並び替えオプション、フラグでメールを确实処理



幅が狭くなったメール一覧部分は、さまざまな並び替えオプションを装備することで、メールを探しやすくしている。



ワンクリックでメールにフラグをつけることができる。右クリックすればフラグの色も選べる。



検索フォルダを使うと、フラグのついたメールを全フォルダにわたって一覧できる。

また豊富な並び替えのオプションとグループ機能で、見たいメールをすばやく探せるようにしている。そのほかOutlook 2003ではフラグと検索フォルダを活用できる。メールの右側をワンクリックすれば、それぞれのメールにフラグを設定できるのだ。また、あとで確認するとき絶大な効果を発揮するのが検索フォルダだ。検索フォルダは、任意のルールを設けて、そのルールで全体のメールを検索し、まとめて表示してくれるフォルダだ。これまでのメールの“仕分け”と違い、すべての

メールは一か所にあり、検索フォルダを使ったときだけ、ルールに適合したメールが表示される仕組みなので、複数のフォルダに重複したルールを設けてしまい、結局仕分けたフォルダを1つずつみていかなければメールが見つからないという不便さからは解消される。

また、Outlook 2003はコラボレーションソフトとしても大幅に進化した。壁のホワイトボードに各自の出先が書いてある会社は多い。これは日本固有の文化だが、Outlook 2003はこのホワイトボードの機

能も取り入れて、Exchange Server上の複数の人の予定表を並べて表示できるようになった。メンバーの予定表だけでなく、SharePoint上のグループ全体の予定表も1つの画面に合成して表示できる。また、SharePoint上の共有連絡先も同様にOutlookで表示でき、共有予定表と合わせて表示できる。会議が多くなってくると、出席者の時間や場所の調整も含めて、その手配にかかる時間だけでもばかにならない。Exchange Serverで会議室などの予定表を作っておけば、空き状況の確認から会議室の予約まですべてをOutlook上で行える。Officeをフロントエンドとして、サーバーやデータの種類にかかわらずネットワークを通じて利用、操作できるようにするというOffice 2003のポリシーがOutlookでも貫かれている。

大規模システムやモバイルで力を発揮するExchange Server

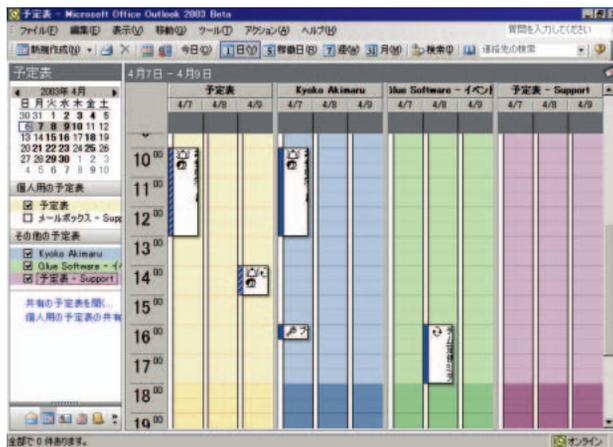
大規模な利用とモバイルでのOutlook、Exchange Serverの利用には共通点がある。帯域幅の問題だ。帯域幅を使うアプリケーションは規模が大きくなればサーバーやネットワークの負荷で動きが重くなり、またモバイルの細い回線では実用に耐えなくなる。Outlook 2003をExchange Server 2003と組み合わせると新しい機能で帯域を助けるようになっていく。1つは「キャッシュモード」と呼ばれる機能で、このモードで使っていると、Outlookは随時自動的に更新されるキャッシュを使って動作する。普段は、Outlookは常にExchange Serverにアクセスしているために複数のユーザーがアクセスするとサーバーへの負荷がかかってくるのだが、「キャッシュモード」では負荷が激しくなったときなどにはアクセスを中止し、オフラインでも、その時点で持っているデータを使って作業が続けられるようになっている。ネットワークのトラフィックが改善すると、データの差分だけを更新す

るので、ここでもサーバーに対する負荷を軽減でき、より巨大なビジネスプロセス統合を目指す大規模システムに対応した仕組みといっていいただろう。

さらにRPC(ネットワーク上の異なるマシンで同時に処理を実行する方法)over httpを用いることで、SSL(Secure Sockets Layer)の暗号化通信をhttpに実装したhttps経由でのサーバーアクセスが可能になった。これにより、敷居の高いVPN接続を必要としなくなったため、モバ

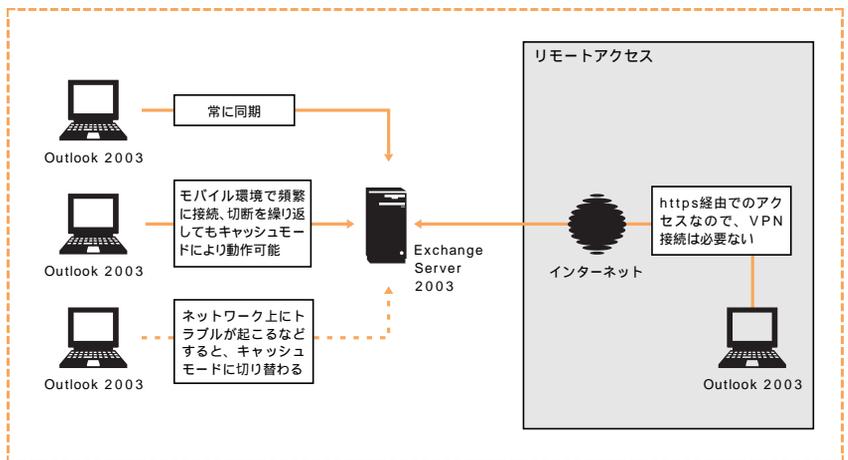
イル環境、また自宅などから手軽にExchange Serverへのアクセスができるようになった。そのうえ、帯域を効率的に利用する「Air MAPI」と呼ばれる新しいプロトコルが、Outlook 2003とExchange Server 2003を利用している場合には自動的にオンになる。もはや現代の仕事は、「オフィス」に縛られてはこなせない。そんな時代に合わせた機能を実装しているのがExchange Server 2003とっていいただろう。

画面5: グループの予定も表示できるOutlook 予定表



グループのメンバーを登録すれば、画面左側でチェックするだけで、複数の予定表を並べて表示できる。薄黄が自分の予定で、薄緑がSharePoint上のグループの予定表だ。

図3: 大規模グループワーク、モバイルアクセスを強化したExchange Server 2003



リモートアクセスでは、https経由でExchange Server 2003にアクセスする。また、アクセスする人数が増えても負荷をうまく分散する「キャッシュモード」も用意されている。



個人の作ったすべての
“文書”を
企業の資産にしてしまう
「Word」

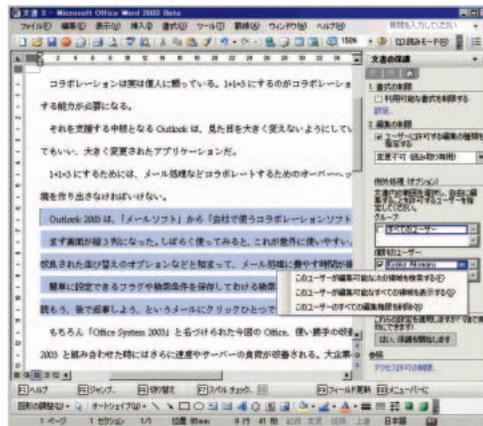
WordはOfficeの中でもっとも広い守備範囲を持たされているアプリケーションだ。表やプレゼンテーションは文書の1つの形態だが、Wordはそれ以外の残り全部をカバーすることになる。このためWord 2003はOffice 2003が実現する新しい「仕事」のすべてにかかわることになる。

コラボレーションワークで使えるワープロとなったWord 2003

コラボレーション環境では、まず1人、あるいは共同で文書を作り、小規模な人数に配布してレビューをする。文書が完成すればより広く配布するかもしれない。そして配布された側もWordを使って文書を読んでいる。このプロセスすべてにおいて使えるようになっていなければ、コラボレーションの中で使うワープロにはなれない。Word 2003ではまず共同で文書の作成を進められるように、文書の保護が強化されている。画面6のように文書の一部を選択して編集する人を割り振ることが可能だ。たとえば章ごとに編集者を割り振れば、間違えて違う部分を変更してしまう心配がない。

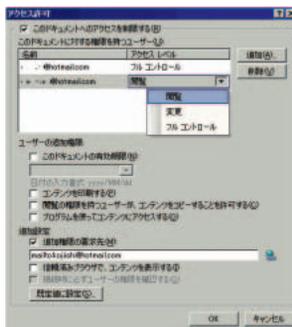
また、Word 2003では完成した文書を配布する場合に、印刷やコピーにいたるまで、細かい使用権限を設定できるのも

画面6：編集者を割り振れるWord 2003

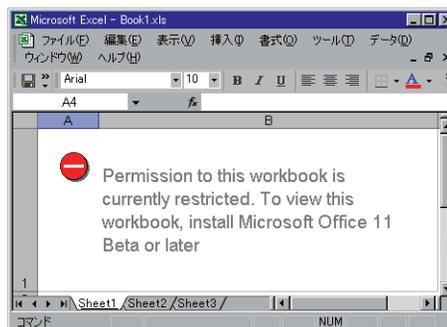


Word 2003ではユーザーごとに編集可能な領域を割り振ることができる。

画面7：文章の使用権限を複雑に設定できる



Office 2003では、文書に閲覧、印刷、コピーなど細かいアクセス許可制御を行うことができる。



権限の設定されたファイルをOffice XPで開くと、エラーが表示される。

コラボレーションワークを行う際に重要な機能だ。この機能はPowerPointやExcel、Outlookでも使える、Office 2003共通の機能だ。まず、その文書を見てもいいユーザーなのかどうかの確認はユーザーの属性、アクセス権などの情報を一元管理する「Active Directory」で行う。あるいはマイクロソフトが予定しているIRM(ファイル単位およびディレクトリー単位で設定するアクセス権)サービスを使うと、HotmailなどのPassportでも認証できるようになる。もちろん、これらを使うにはネットワークから認証サーバーなどに接続されていることが前提となっている。ここからWordはクライアントだけで動くワープロソフトとは言えなくなっていることがわかるだろ

う。アクセス権の制御では、画面7が表示され、閲覧、コピー、印刷などそれぞれのアクションに応じて権限を設定できる。権限のないユーザー、あるいはOffice 2003より前のバージョンで開くとエラーとなって表示される。社外秘の資料などに設定しておけば、メールアドレスを間違えて別のの人に送ってしまったても、相手は中を見ることができない。Outlook 2003でもこれらアクセス制限をかけたファイルの転送を禁止できるので、「転送不可」と書かれたメールが転送されてくる、という冗談のような話はなくなるだろう。すべてのクライアントをOutlook 2003にしまえば、コピーも転送も印刷もできないメールを送ることができるのだ。

Office 2003で仕事が変わる!

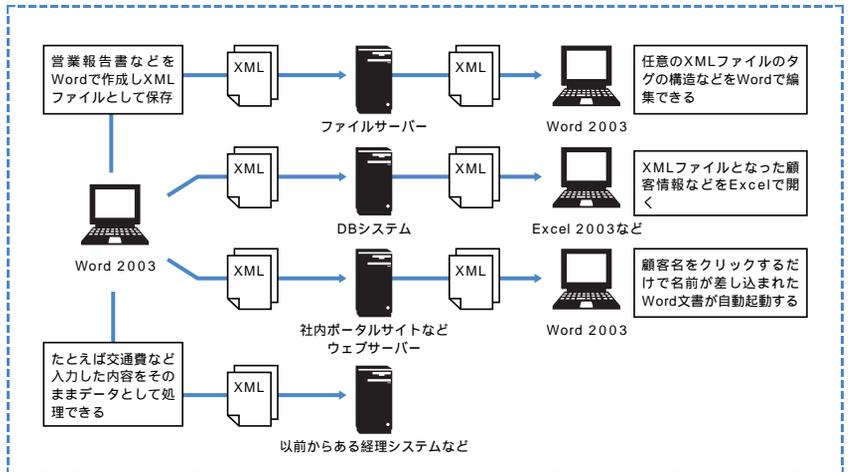
マイクロソフトのビル・ゲイツ氏が送る全社員向けのメールは翌日にはどこかのウェブサイトに公開されたりしているが、このようなことは今後なくなるかもしれない。

XMLでWord文章を企業システムと連携させる

Word 2003はXMLに対応しているのも大きな特徴だ。XMLの特徴を簡単に説明すると、さまざまなアプリケーションやシステムで使えるデータの形式と言ってもいいだろう。したがって、たとえば営業報告書の書式を決めておいてXMLで保存すれば、それをまとめて読み込んで、自動的にすべての文書のタイトルだけを表示する社内ポータルサイトを作る、といった企業システムが簡単に構築できる。逆に社内のウェブサイト上で、XMLで保存されている顧客名をクリックすれば、名前などの情報を差し込んだ状態でWordが起動する、といった自動生成も可能だ。つまり、Word文書をそのままデータとしてさまざまなシステムで使えるようになるのだ(図4)。

Word 2003のXML対応のもう1つの側面は、任意の構造のXMLファイルを開いてその構造を編集できることだ。このと

図4：XMLファイルで保存することでWord文書がさまざまなシステムと連携する。



リモートアクセスでは、https経由Exchange Server 2003にアクセスする。また、アクセスする人数が増えても負荷をうまく分散する「キャッシュモード」も用意されている。

き、XMLファイルの変換やレイアウトを指定する簡易スクリプト言語XSLTや、XML構造の標準的“設計図”というべきXSDなどの標準規格にも対応しているので、Word文書テンプレートを作って配布しておけば、ユーザーは普通のWord文書を編集しているに過ぎないが、保存するとテンプレート作成者が指定したXML文書の構造にならったXMLファイルに、自動的に変換して保存してくれるというメリットもある。企業システム側でXMLのスキーマ(構造

の設計図のようなもの)がすでに決まっている場合でも、ユーザーはそのXML文書の構造を意識することなく、たとえば営業報告書を普通にWord 2003で入力すればよい。それだけで、その営業報告書は企業に蓄積されたデータ資産となるのだ。

ユーザーの環境を変更することなく、XMLを利用してWord文書をそのまま企業システムにデータとして渡せる機能の意義は、仕事のパラダイムシフトを起こすという意味で大きなものだ。

オフィス製品部部長 横井伸好氏インタビュー

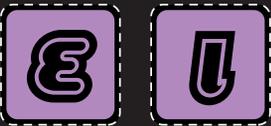
インフォメーションワーカーの武器になるためにパラダイムシフトしたOffice 2003

「今年でOfficeは10年目を迎えます。これまでOfficeはワープロ、表計算などのソフトとして使い勝手を上げてきました。ただ、私どもはそれだけではもったいないと思っています。インフラが整い、まさにITの分野はセカンドステージに入っていますね。そのときOfficeがユーザーをヘルプできるのはドキュメントクリエーションの部分だけではないはずですよ。そこで現れたのが「インフォメーションワーク」という概念です。インフォメーションワークとは仕事の過程にある「文書作成」「情報へのアクセス」「情報の吸収」「コミュニケーション」「コラボレーション」などを効率的に処理し、それ

に基づいて“アクション”を起こす仕事のスタイルですが、これまでのOfficeは“文章作成”くらいにしかなかった。今回はコミュニケーションにOutlook、コラボレーションにSharePointなどといった形でインフォメーションワークのすべてをヘルプするものとなっています。多くの人がインフォメーションワーカーになる、そのお手伝いをOfficeができて、今の経済にもパラダイムシフトを起こせるんじゃないかと思っています。ツールではなく、インフォメーションワークを行うためのシステムとして使える。それがこれまでのOfficeとは大幅に変化した新Officeなのです。」



Office 2003で今の経済にもパラダイムシフトを起こしたいと語る、マイクロソフト オフィス製品部部長 横井伸好氏。



「Excel」「InfoPath」の導入でXMLによるデータ連携は仕事に欠かせなくなる

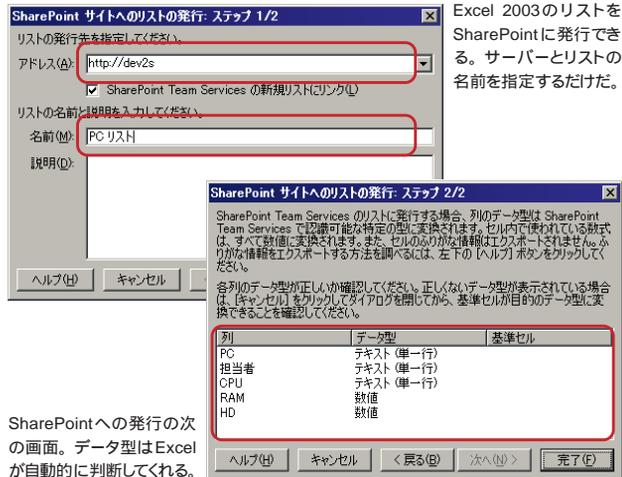
Office 2003の一員として、Excelも「コラボレーション」と「企業システムとの連携」という方向に向けて新しい機能が追加された。Excelは言うまでもなく、Officeの中で表をあつかうメインのアプリケーションだ。ただし、Excel 2003になることで、「表」は表以上の価値を持つことになる。

高度な共有リソース作成ソフトとなるExcel

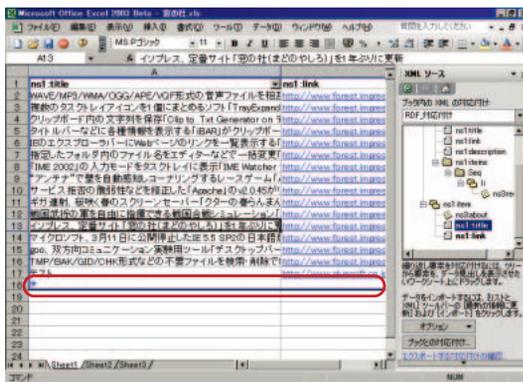
住所録や顧客リスト、仕事の振り分けなどをExcelに入力してファイルサーバーに置いたりメールで配ったりすることは多いだろう。しかしこれを共同で更新しようとするとなかなかうまくいかない。たとえば顧客リストを、だれもがいつでもどこでも一覧でき、かつ更新もできるようにしたいとしよう。データベースにすればいいのはわかっているが、わざわざ新しいデータベースを作って、専用のクライアント用プログラムを作るわけにもいかない。

Excel 2003は違う。まずExcelで元となる顧客リストなどの表を作る。メニューから [リストの作成] を選ぶと、列がSharePointのパートで説明した「リスト」として作成される。これをSharePointに発行することで、リストはグループのメンバーすべてが共有できるリソースとなる。画面

画面8：2ステップで完了するリストの作成



画面9：RSSをExcel 2003で開いた画面



8の2画面のウィザードを終了すると、SharePoint 上にリストが新しく作成され、Excelの表とリンクされる。作成されたSharePointのリストは、SQL Serverのデータベースになっている。これにより、自宅や出先でExcelを使ってデータを編集して、会社に戻ってから同期ボタンをクリックすれば、変更内容がサーバーに書き戻され、かつほかの人の更新分も含めた最新情報を取り出せる。

コラボレートするための基盤があるだけでは実際には使われない。SQL Serverに代表されるリレーショナルデータベースなどもう20年も前からあるのだ。そのコラボレートするための基盤を現実の仕事の流れに合わせて、だれでも使える形に

して、初めて効果は発揮される。それをExcel 2003は実現している。

XMLでインポート/エクスポートが強化されたExcel / Access

Excel / Access 2003はXMLに対応したことで、新しい使い方ができるようになった。現在もっとも日常使用に近いXMLはRSS(Rich Site Summary)ではないだろうか。RSSはニュースやメルマガ、日記など、日付のついた記事リストのサマリーを表現するXMLの標準規格だ。欧米ではかなり普及が進み、たとえば日本でもYahoo! eグループなどがRSSでのデータ提供を始めている。

Office 2003で仕事が変わる!

画面9は窓の杜の記事をRSSに変換したものをExcel 2003で開いた画面だ。開くと右側にXMLのタグ構造が表示される。このなかから見たいデータを見たい場所へドラッグ&ドロップすれば、そのXMLデータをExcelのワークシートに読み込んで扱えるようになる(この機能はProfessionalのみに付く)。今までのインポート/エクスポートの定番はCSV形式だったが、Excel 2003によって、より豊富なデータを表現できるXMLに置き換わっていき、さまざまなものをデータとして、ネットワークを介してあつかえるようになるだろう。逆にExcelからXMLを書き出すこともできる。画面9のいちばん下の青い*の行に入力するとデータが追加されるので、XMLエクスポートを選べばXMLのタグを正しい構造でExcelが自動的に作ってくれる。書き出すときのXMLは、既存のXMLに合わせて書き出すこともできるし、XMLのスキーマの構造を定める標準規格のXSDを使って指定することもできる。Access 2003でも同じように、任意のXMLをインポート/エクスポートできるようになっており、さまざまな情報をデータとして共有できるようになるのだ。

XMLデータ入力フォーム作成に特化した新ファミリー-InfoPath

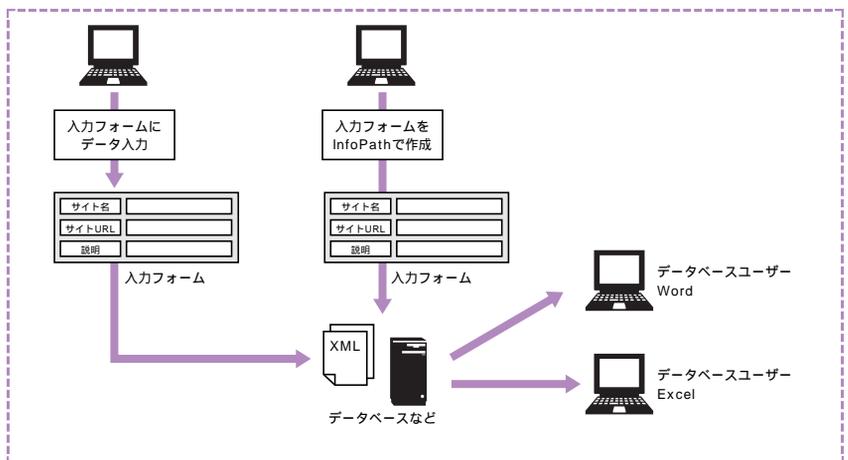
たとえば前述の顧客リストが全社規模になってくると、企業システムとしてデータベースができ、それに対する入力フォームが必要になってくる。Office 2003ファミリーに追加された新ソフトInfoPath (Professionalバージョンのエンタープライズエディションのみ標準添付される)は、この入力フォーム作成に特化したソフトだ。プログラムを書くことなくビジュアル的に入力フォームを設計でき、ユーザーはこの入力フォームを使って、XML形式でデータをデータベースに書き込めるようになるのだ。もちろん、入力したデータはXMLに準拠しているのだから、データのアウトプット

としてExcelやWordなどを使える(図5)。画面10はInfoPathで作った、RSSの入力フォームを作成している画面だ。この程度の画面であれば、元になるXMLファイルをデータソースとして指定するだけで、指定した形式に沿ったXMLファイルを生成して保存したり、ウェブサービスに送信したりする入力フォームを5分ほどで作成できる。入力フォームを作成する場合には、InfoPathをデザインモードに切り替える。画面右側にはXMLの構造が表示され、どのフィールドをどのタグにマップするかを指定できる。残念なのは、一見ほとんどHTMLに見える入力フォームだが、InfoPathの入力フォームは、それを使うユーザーの入力時にもブラウザではなく、

InfoPathが必要になることだ。このため導入コストの高騰や、すべてのクライアントにセットアップする手間が必要といった懸念は残るが、その制御の細かさはブラウザベースの入力フォームとは比べ物にならない。また次世代フォームの標準規格であるXFormsに対応していないのも残念なところだ。時間的に間に合わなかったか、XFormsでは機能が足りなかったかは不明だが、こここのところ標準規格を重要視してきたマイクロソフトとしてはちょっと珍しいパターンだ。

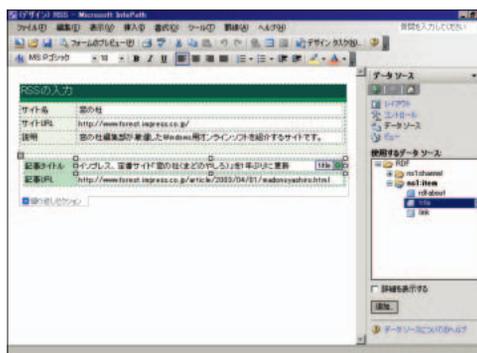
この2つがクリアできるのであれば、InfoPathはフォーム入力ツールとして、仕事で扱うすべての情報を共有する“窓口”になる可能性があるのだ。

図5: InfoPathの用途



入力フォームを作成する側、入力する側どちらもInfoPathが必要だ。もちろん、入力したデータはXML形式なので、さまざまなシステム、アプリケーションであつかえるようになる。

画面10: InfoPathで入力フォームを作る



InfoPathのデザインモードでは、フィールドとXMLタグをマップさせながら、入力フォームを生成できる。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp